

聖書：マタイ 22：23～33

説教題：生きている者の神

日時：2020年4月5日（朝拝）

今日の箇所ではサドカイ人たちがやって来てイエス様に挑戦します。このサドカイ人は神殿での活動に大きな権威を持っていた人たちで、裕福な貴族階級に属する人たちでした。良く対比されるパリサイ人らが平民の出身でイスラエルの宗教に熱心な人たちとして多くの人々から尊敬されていたのとは対照的に、サドカイ人はそのような人気はない人たちでした。彼らは合理主義者で、死後のいのちはない、人は死んだら肉体も魂も滅びるという立場を取っていました。使徒の働き 23 章 8 節には、ユダヤの最高議会でパリサイ人と意見が分かれたことが次のように記されています。「サドカイ人は復活も御使いも霊もないと言い、パリサイ人はいずれも認めているからである」。そんな彼らは前回、パリサイ人たちが見事にイエス様に敗北したのを見て、入れ替わるようにして登場します。自分たちの株を益々上げるチャンスと見込んで土俵に上がって来たのでしよう。

その彼らの問いは、彼らが持論とする「復活はあり得ない」という主張に関するものでした。彼らはモーセ五書のみを受け入れていて、ここでも五書の中の申命記から引用して言います。「モーセは『もしある人が、子がないままで死んだなら、その弟は兄の妻と結婚して、兄のために子孫を起さなければならない』と言いました」と。これはいわゆるレビラート婚の律法です。レビラートとは「夫の兄弟」と意味するラテン語「レビル」から取られた言葉だそうですが、その家の名がイスラエルから消し去られないようにするための規定でした。これと関係する実際的な記事として創世記 38 章のタマル、ルツ記におけるルツの物語等をあげることができます。この規定に訴えてサドカイ人は一つのケースを想定します。25～27 節：「ところで、私たちの間に七人の兄弟がいました。長男は結婚しましたが死にました。子がいなかったため、その妻を弟に残しました。次男も三男も、そして七人までも同じようになりました。そして最後に、その妻も死にました。」そして言います。28 節：「では復活の際、彼女は七人のうちのだれの妻になるのでしょうか。彼らはみな、彼女を妻にしたのですが。」この話は二人の兄弟が登場すれば十分ですが、サドカイ人は話を大きくするため、また面白おかしくして自分たちの主張をより強力なものとするため、わざわざ 7 人の兄弟を登場させます。そして言います。もし復活が本当なら、この女は誰の妻になるのか。7 人の兄弟は天国で一人の

妻を巡ってけんかしなければならなくなるのではないか。これは不合理である。だから復活などはない。そうではないですか？そのように迫って来たわけです。

そんな彼らにイエス様は言われました。「あなたがたは聖書も神の力も知らないで、思い違いをしています」と。ここでイエス様はサドカイ人たちは二つのことを知らないと言いました。それは「聖書」と「神の力」です。まず彼らは「聖書」を知らない。サドカイ人たちは聖書を引用してイエス様に挑戦しました。彼らとしては聖書を良く知っているつもりでいました。しかしイエス様いわく、本当の意味では聖書を知らない。つまり聖書読みの聖書知らず。表面的には引用することができても、自分たちが言いたいことを言うために使っているだけ。得意気にモーセはこう言っている！と引用しても、肝心のメッセージが分かっていない。聖書が分かっていない。イエス様はこの後、31節以降で、彼らが受け入れているモーセ五書の中から、聖書は何と言っているか、聖書をどのように読むべきかを示して行かれます。

これとセットになっているのは「神の力」を知らないということ。サドカイ人らは合理主義者でした。人間の頭で考えられることだけを受け入れていました。その枠の中でだけ聖書を読むため、神とその力を小さく押し込めてしまっている。だからさっきのような話になる。7人の兄弟が一人の妻と順次結婚したら復活後はどうなることか。これは神の力に思いを向けていない誤りであるということです。人間の考えをはるかに超える神の世界があることに思いを向けていない。そんな彼らにイエス様は、やがての世界は今私たちが生活している世界とどんなに違うかということをお話しされます。人間の頭で考えられることだけで考えてはならないことを示すためです。

そのためにイエス様が言われたことは、「復活の時には人はめとることも嫁ぐこともない」ということでした。すなわち天国には結婚がないということです。初めて聞く人はびっくりするかもしれません。地上での結婚は永遠に続く関係ではないのか。それは永遠の愛を誓うものではなかったのか。夫婦は天国でも夫婦なのではないかと。しかし聖書は明確にこれに対してノー！と言っています。この一つのことを取ってみても、私たちはやがての天での生活を単なる地上の生活の延長のように考えてはならないことを教えられます。

ここでイエス様を示していることは、神はやがて私たちを結婚関係や性的関係がない

状態に造り変えることができるということです。そんなことは考えられない！と言っ  
はなりません。そのモデルはすでに存在しています。それはイエス様がここで言っ  
られるように、天の御使いたちです。彼らには性もなく、結婚也没有。その彼ら  
の天における生活は地上にある私たちの生活より幸福でないかと言えば、そうではあり  
ません。彼らは今の私たちよりはるかに幸いな状態にあります。神のみそば近くで、神  
をいつもほめたたえ、神を喜ぶという、地上にはるかに勝る天的生活を送っています。

しかしどうして天では結婚がないのでしょうか。その理由は地上で結婚が定められた  
目的を考えると分かって来ます。結婚の一つの目的は「生めよ、増えよ、地を満たせ」  
と聖書で言われている出産と関係します。これは天国ではもう必要ありません。天国の  
人口は増えることも減ることもありません。ですからその意味で結婚は不要です。また  
結婚は地上にある私たちの弱さのために与えられた補助的的制度であることが創世記2章  
から分かります。人が一人であるのは良くないと神は言われました。孤独を避けるため、  
むしろ二人が一体となって強め合ってよりよく神の目的に生きるために、神は結婚を定  
められました。しかし天国では神の十分なお臨在があつて、一人一人は神と豊かに結び  
つき、そこに十分な満たしが与えられるため、伴侶がいなくては孤独だと感じることは  
ないのです。これはもちろん、復活後の世界では、地上で夫婦であった者たちの愛の関  
係が失われるとか、互いに急に冷たくなるとか、地上の関係を忘れてしまうというこ  
ではないでしょう。たとえばルカの福音書16章の不正な管理人のたとえに示されてい  
ますように、地上での良いわざは永遠に記憶され、記念されます。地上の生活は永遠的  
な意義を持ちます。しかしやがての天では神との豊かな交わりから来る十分な満たし  
があるので、結婚関係がないと物足りないということはないのです。誰か伴侶を自分一  
人のもんとして独占しなければ満足できないという状態にはならない。地上での関係  
を思い起こして、良き思い出のすべてを一層感謝しつつも、そのことに勝つて何より  
も神を喜び、神にあつて満足するという世界に私たちは生きる者とされるのです。

このことは願いつつも地上で独身であった人、あるいは願わずして結婚が破綻した人  
にとって慰め深い教えではないでしょうか。もし地上でうまく行つた夫婦が天国でも夫  
婦として仲良く暮らして、より幸せの状態にあるとしたら、そうでない人たちは天国  
に行つても何かさみしさを覚えることになつてしまいかねません。しかしそうでは  
ないのです。地上では色々なことが起こります。しかしやがての世界ではすべての  
人が神と結ばれて最終的にきよめられた最高の状態に入りますから、誰かを見て羨  
ましく思うこと

もありませんし、誰かと比較して誇ったりするということがありません。

とするなら今日の箇所です。サドカイ人らが持ち出した問いの答えも明らかになるのではないのでしょうか。7人の兄弟と一人の妻がみな天国に行った場合、一人の妻を巡って7人の兄弟が争うことはないのです。そこにはもう結婚はありませんし、互いに対するねたみや争いはないのです。一人一人が神と結ばれて全き喜びを味わいつつ、皆を愛することができるのです。地上の人間関係で色々なことがあったとしても、キリストにあって互いに赦し合い、今や神を永遠にほめたたえてともに歩むことができるのです。これは確かに私たちの思いを超えた世界です。このように導くことができる神の力に私たちは思いを高く上げなければならないのです。

この神の力についてはコリント人への手紙第一 15 章のパウロの言葉も参考になります。15 章 35～49 節でパウロは私たちの今のからだと復活後のからだを、「種」と「実」の関係にたとえています。「種」と「実」は見た目は全く違います。あの小さな種からどうやってあのような実ができるのか、改めて考えると不思議ではないのでしょうか。しかし「種」は地に蒔かれると、後からあのような「実」ができます。私たちも死んで葬られ、いわば地に蒔かれると、よみがえらされる時、先の状態からは考えられないようなものに変えられることとなります。パウロはこう言います。I コリント 15 章 42～44 節：「死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらされ、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらされ、弱いもので蒔かれ、力あるものによみがえらされ、血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。」今日の箇所では復活後の世界には結婚がないことが言われましたが、他に聖書から復活後の世界では食事が必要ではないこと、食べ物を定期的に摂取しないと衰えるような弱い体ではないこと、従って病気もないこと、また夜がないこと、従って睡眠を必要としないこと、休まないと疲れるような体でないこと、などの示唆があります。ですから私たちは人間の頭で考えて決めつけてはならないのです。神の力は私たちの想像をはるかに超えて大きいものです。その神の力に信頼して、神が導いてくださる最高の世界を待ち望む歩みをすべきなのです。

さてイエス様はサドカイ人たちに「聖書も知らない」と言われました。そこでイエス様は彼らが受け入れているモーセ五書の中から、聖書が何と語っているかを示して行かれます。イエス様を取り上げたのは出エジプト記の中のあの有名な燃える柴の中から神

がモーセに語りかけられた場面です。出エジプト記3章6節になりますが、神はそこで「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と言われました。ここに神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神であることが示されているとイエス様は言われます。つまり死者の復活はあるのだと。一見どうということかと私たちは思うかもしれません。神がモーセにこの言葉を語られた時、言うまでもなくアブラハムもイサクもヤコブもこの世にはいませんでした。すでに何百年も前に地上を去っていました。しかし神はここでご自分を「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と現在形で表現されました。過去形ではありません。昔、彼らの神であったという言い方ではありません。今なお彼らの神である。ということは彼らは生きている。死んで滅びたのではない。神は彼らをいのちの内に保っておられる。聖書はそのことを示しているとイエス様は言われたわけです。

もう少し丁寧に言えば、こういうことになるでしょうか。神はこの「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」という表現によって、彼ら族長たちに与えた契約を思い起こしています。そしてその約束は、彼らが地上にいた間にも、またモーセにこの言葉を語られた時もまだ成就していません。土地に関する約束も、子孫に関する約束も、救い主に関する約束も果たされていません。そんな中、神はご自分を「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と語ることによって、族長たちに与えた契約を思い起こし、これを必ず果たす神であることを示しておられます。これはもし族長たちが死んで滅んでしまったならナンセンスです。彼らがまだ生きているから、死を越えてもなお神が彼らを守っておられるから、神はご自身をなお「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と現して、その契約を守って行こうとされたのです。ここにははっきりと死後のいのちがあるというメッセージがあります。そしてこの約束が究極的に成就するのはやがての復活の日においてです。その日に神はすべて約束を果たした方として、彼ら族長たちを、また彼らに与えた契約に従って待ち望んだ者たちを、最終的な祝福の状態に入れてくださるのです。このことを読み取っていなければ聖書を知っているとは言えない、とイエス様は言っているわけです。そこには死後のいのちについて、永遠のいのちについて、やがての復活についてのメッセージが中心的なものとして語られているということなのです。

さて私たちはどうでしょう。私たちもサドカイ人の誤りに陥っていないでしょうか。聖書に親しんでいるつもりでいながら、「聖書も神の力も知らない」とイエス様に言わ

れることはないでしょうか。神はアブラハム、イサク、ヤコブが地上を去った後も、わたしは彼らの神であると言われました。「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です」とイエス様は言われました。ここから改めて今朝思わされることは、これは私たちより先に天に召された兄弟姉妹にも同じく当てはまるということです。ある人は先に天に送った伴侶のことを思うでしょう。ある人は大切な家族のことを、ある人は親しかった友人のことを、あるいは恩師を、あるいは教え子を、その他、様々な地上を去った愛する人たちのことを思うでしょう。その人たちについて今日の箇所から確認することは、その人たちはただ死んで地上からいなくなったのではないということです。神は「生きている者の神」です。神は奇しい慈しみの御手の中で、その方々を今日も守り、生かしていただきます。そしてやがての復活の時には、私たちの思いをはるかに超える祝福の世界へ導き入れていただきます。

そしてもちろんこれは今、地上にある私たちにとっても大きな希望のメッセージです。私たちがやがて地上の人生を終えて死を迎えます。一日一日、私たちは確実にその日に近づいています。そんな私たちの人生は、将来のことは良く分からないから、せいぜい地上にいる間、楽しむだけ楽しもう！という人生なののでしょうか。あるいは楽しみたくても楽しめない苦しい毎日を送っており、この先にも望みはないという人生を送っているのでしょうか。そうではありません！神は死を越えて私たちを守り、生かしてくださる方です。そして今の私たちからは考えられないような素晴らしいのちの世界を、神の力によって用意してくださる方です。「復活の時には人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです」と言われる天的な祝福の世界を用意して下さっている方です。私たちはそのような将来が私たちの行く先に備えられていることを「聖書」を信じ、また「神の力」を信じて喜び見つめて、これからの歩みを導かれてまいりたいと思います。そして特に今週は受難週です。今日見て来た祝福は、ただイエス・キリストの身代わりの十字架の死を通して私たちに与えられるものです。この主の十字架を心より感謝して、この救い主によって罪を赦され、神との交わりを回復され、「生きている者の神」となったださる神を私の神として持つ者とされ、復活の日をいよいよ楽しみに待ち望む救いの民の幸いな歩みへ導かれて行きたいと思います。